



アイヌ文化の振興、現在と未来
第7回

アイヌ文化の担い手 を育てるために —ウレシパ・プロジェクトの軌跡—



本田 優子 (ほんだ ゆうこ)

札幌大学副学長

1957年金沢市生まれ。北海道大学卒業後、萱野茂氏の助手として平取町二風谷に移り住む。『萱野茂のアイヌ語辞典』の編纂作業に携わるとともに、二風谷アイヌ語教室子どもの部講師を務める。94年北海道立アイヌ民族文化研究センター非常勤研究職員。2005年札幌大学着任。文化学部長を経て、11年から現職。

はじめに

2010年、「ウレシパ・プロジェクト」という新しい試みが、札幌大学に導入されました。「ウレシパ」とは「育てあう」という意味のアイヌ語です。このプロジェクトの推進母体が、一般社団法人札幌大学ウレシパクラブ（以下、ウレシパクラブ）であり、アイヌ文化を学ぶ札幌大学の学生たちと、彼らを支援しつつ自らもアイヌ文化に関わっていかうと考えてくださっている企業や一般の方々によって構成されています。当初は札幌大学内に位置づけられた組織でしたが、2013年には一般社団法人となりました。

本稿では、ウレシパ・プロジェクトの概要とウレシパクラブメンバーとして活動している学生たちを取り巻く状況について、簡単にご紹介したいと思います。

ウレシパ・プロジェクト創設の背景

まず、プロジェクト創設の経緯についてご説明しますが、その前に、私自身の個人的体験について若干述べさせていただきます。

私は石川県金沢市で生まれ、北海道大学に進みました。大学4年生の時、平取町二風谷在住の萱野茂先生（1926～2006。当時二風谷アイヌ文化資料館館長）のアイヌ語復興運動に共感し、1983年、卒業と同時に二風谷に移り住みました。二風谷は人口500人弱の小さな集落ですが、アイヌの伝統文化を受け継ごうとする人々が多く住んでいることで知られています。ちょうどこの年、地域の子どもたちを対象とする萱野先生の私塾、「二風谷アイヌ語塾」がスタートしました。1987年、この塾は国と道の補助金を受けた「平取町二風谷アイヌ語教室」へと発展的に改組され、私はアイヌ語教室子どもの部講師を務めるようになりました。

アイヌ語教室の創設および指導・運営に関わる中で、私の中に、アイヌの子どもたちの教育に関する強い問題意識が生まれてきました。1つは、大学進学率が和人の約半分というアイヌの子どもたちに、なんとか大学進学^{ひら}の道を拓きたいということ。もう1つは自らの民族文化を学ぶ場を子どもたちに提供する必要があるということでした。私は、二風谷を訪れる有識者の方々

に幾度となく、この2つの課題の解決を訴え協力をお願いしましたが、進展はみられませんでした。

その後、諸般の事情から94年に生活の場を札幌へと移した私は、2005年、札幌大学文化学部アイヌ文化を専門とする教員として着任しました。そして09年、思いがけず文化学部長というポストが与えられることになり、自分がなにをなすべきか問う中で、ウレシパ・プロジェクト構想が生まれました。この時、初めて私は、前述の2つの課題は、外部の有力者に懇願するのではなく、自分自身が解決すべきことだったのだと自覚したのです。

プロジェクトの概要

ウレシパ・プロジェクトには、3つの柱があります。その概要とこれまでの成果についてご紹介します。

① ウレシパ奨学生制度

これはウレシパ・プロジェクトの根幹をなす制度です。前述のように、アイヌの若者たちの大学進学を可能とするためには、経済的問題を解決しなければなりません。そこで本学では、入学金・授業料と同額のウレシパ奨学金を給付することにしました。その代わりに、ウレシパ奨学生たちは必ずウレシパクラブに所属し、必死でアイヌ語・アイヌ史・アイヌ文化を勉強し、対外的に発信する活動を行う義務を負います。その過程で鍛えられ、アイヌ民族の次代を担う人材として育っていきます。

しかし、アイヌ民族に特化した奨学金の給付など日本では前例のないことですから、学内ですんなり認められるはずがありませんでした。「良いことではあるが時期尚早」という意見から、「学生の多くが経済的に困窮しているのにアイヌだけを優遇するのは逆差別である」という見解まで、様々な反対がありました。しかし幸いにも、奨学生の受け入れ先となる文化学部の教育理念は「共生と調和」であり、目指すべき人物像が「多様性の尊重」等でした。この奨学生制度によってアイヌの若者たちの進学を促し、学内に多文化共生のコミュニティーモデルがつくられるならば、マジョリティー（多数者）の学生たちに、共生や多様性の価

値を学ぶためのトレーニングの場を提供することができます。すなわちこれは、教育理念を実現するための新たな教育プログラムでもあると主張し、学内理解を得ることができたのです。もちろん、学内外の様々なご支援が、大きな力となったことは言うまでもありません。

第1期のウレシパ奨学生3名が卒業したのは、14年3月のことでした。全員、ウレシパクラブの活動を中心的に担い学業成績も優れていたということで、卒業式では学長表彰を受けました。しかもそのうちの1人の女性は、経済的な問題から大学進学を断念していたのですが、ウレシパ奨学生として社会人入学し、ダントツ一位の成績を修めました。自らが縫った華やかな民族衣装をまとって登壇し、総代として学長から卒業証書を受け取った彼女の姿は、今も私の目に焼き付いています。

② ウレシパ・カンパニー制度

これは、一般企業にカンパニー会員になっていただき、様々な交流の機会を設ける中で、学生たちと顔と顔の見える関係を築くことをねらいとした制度です。そして、その過程で本当に優秀なウレシパ奨学生が育ったならば、卒業後の採用をも検討していただくというものです。カンパニーには、中核となって支えてくださるウレシパ・カンパニーと、主に資金面でご支援くださるポロ・カンパニー、ポン・カンパニーの3つの種別があります。

ウレシパ奨学生制度が大学進学のための「入口の保障」の意味を持つとすれば、ウレシパ・カンパニー制度は「出口の保障」としての役割を有しています。というのは、従来、就職活動の際にアイヌであると口にする人はほとんどいませんでした。アイヌだということが就職に有利に働くとは思えないからでしょう。私



ウレシパ・フェスタでクリムセ（弓の舞）を踊る学生たち

はかつて企業経営者に「どうしてアイヌだとわかると採用されないのでしょうか？」と尋ねたことがあります。その方はこう答えました。

「自分には差別意識はない。だから個人的には採用したいと思う。けれども、社員にそういうことをきいたこともないから、みんなが私と同じ考えかどうかはわからない。もし、アイヌだとわかっている人を採用して職場で差別が起こり、社会的問題になったら、会社は致命的ダメージを受ける。経営者というのはそのようなリスクは避けなければならない」。

率直な回答だとは思いましたが、いつまでもそのような状況に甘んじるわけにはいきません。ウレシパ奨学生たちは、自分たちがアイヌであることを前面に出して活動するわけですから、なんとかして、彼らが堂々と就職していける道を保障する必要がありました。そのためには、企業とフェイス・トゥー・フェイスの緊密な関係を築き、一緒に彼らを育てていただくしかないと考えたのです。とはいえ当時の私には、つながりのある企業など皆無でした。「志の高い企業」があるに違いないという信念だけで、カンパニー制度を立ち上げたのですが、今では、中核的に担ってくださるウレシパ・カンパニーが25社、ポロ・カンパニー、ポン・カンパニーをあわせるならば、40社を超える企業がカンパニー会員になってくださっています。しかも、学生たちの企画した山菜採りやウレシパ・ツアー、ウレシパ・フェスタ等、様々な催しにトップ自らをご参加くださるという、願っていたとおりの関係が築けており、本当にうれしく思います。

おかげさまで、15年3月に卒業した第2期ウレシパ奨学生の1人は、ウレシパ・カンパニーである大きな企業に採用していただきました。その社長さんは「別に彼がウレシパ奨学生だから採用したわけではない。彼自身に力があり良い青年だったからだ」とおっしゃっていますが、それこそ私が望んだ姿だといえます。

このように、「出口の保障」として考案されたウレシパ・カンパニー制度ですが、実はもう1つの社会的意義があります。それは、知名度の高い多くの企業が

アイヌの若者たちをサポートしているという事実が、アイヌ民族やアイヌ文化への関わりをためらう人々や、まだ無関心なままでいる大多数の人々に対して大きな安心感を与えるということです。

③ ウレシパ・ムーブメント

ウレシパ・プロジェクトの大きな特徴として、和人の学生たちの熱心な関わりが挙げられます。マジョリティーの学生もアイヌ文化を学び、ウレシパ奨学生たちと共に活動する過程で「多様性」を尊重する感覚を養うことができます。そして、多文化共生コミュニティのモデルづくりに参画し、その経験や成果を積極的に学外に発信しているのです。

また、大学の中でのアイヌ民族理解も変化してきているように感じます。私はかつて毎年、アイヌ文化の授業の1回目にアンケートを取っていましたが、多い年には3人に1人以上の学生が、アイヌ民族の人口は1,000人以下だと答えていました。実は、北海道庁が行った最も新しい調査では、16,786人（平成25年調査）となっていますが、これは自分がアイヌであることを認めた人の数です。アイヌ民族に対する社会的差別が続いた状況のなか、公言したくないと考える方はまだ多いと考えられ、そのような人々はカウントされていません。また都市で生活するアイヌの人々が増え、自分がアイヌの血を受け継いでいることを知らない方も多いように思います。ですから、調査に基づく人口と実数との間には大きな開きがあり、実際には一般に考えられているよりもはるかに多くの人口があると思われます。にもかかわらず、学生たちの多くは、「自分が一生出会うこともないようなごく少数の人々」というイメージを持っていることがわかりました。

しかし、ウレシパクラブというアイヌの若者たちを中心とする集団が生まれ、活発に活動するなかで、本学には、アイヌ民族の存在を当然のことと考え、アイヌ文化を共に学ぼうとする空気が育ちつつあります。

国のアイヌ政策との連動

このようなウレシパ・プロジェクトの進展は、日本政府のアイヌ民族政策と密接に連動したものです。

2008年6月6日、政府は初めてアイヌ民族を日本の先住民族であると認めました。その後、内閣官房にアイヌ総合政策室が設置され、官房長官を座長とするアイヌ政策推進会議が発足しました。アイヌ政策推進作業部会で具体的議論が重ねられるとともに、「民族共生の象徴となる空間」（以下、「象徴空間」）の建設についても検討が進められました。その結果、20年には白老に、象徴空間とその核となる国立の博物館が建設されることとなりました。

このような状況のなか、国民理解促進のために民間との協力関係の構築が課題として挙げられてきましたが、ウレシパ・プロジェクトは、ある意味、その部分を先駆的に担ってきたといえます。学生たちの行うイベントに参加していただくなかで、会員の皆様のアイヌ文化についての理解は確実に深まってきました。

例えば、ゲストに坂本龍一さんをお招きした2013年のウレシパ・フェスタには、本当に多くのカンパニーのトップの方々にご参集くださいました。フィナーレには坂本龍一さんと共に、壇上でイオマンテリムセ（クマ送りの踊り）を体験していただき、懇親会でも和やかな交流の輪が広がりました。もちろん、一般会員の皆様も多数ご参加くださいました。

同じ年、内閣官房アイヌ総合政策室が提唱する「イランカラッテ・キャンペーン」が始まりました。アイヌ語で「こんにちは」を意味する「イランカラッテ」を、北海道のおもてなしの言葉にしようという試みであり、各地で様々な催しが企画されました。その一環として、札幌の玄関口ともいえるJR札幌駅に、アイヌ文化を象徴するようなモニュメントの設置が提案され、思いがけずウレシパクラブが設置主体となったのです。学生を中心とする小さな団体に、はたしてそのような大事業が担えるものかとも悩みましたが、社会的意義を考え、学生たちと共に努力する決意をしました。この時は、多くのウレシパ・カンパニーに多額のご寄付をいただいた他、複数の大手スーパーマーケットが共同で店頭募金を展開してくださいました。また、ウレシパクラブの個人会員や多くの道民の方々のご支

援も大きな力となりました。内閣官房、北海道、札幌市等、多くの行政の方々、そしてなによりもJR北海道のお骨折りとご指導を忘れるわけにはいきません。この場をお借りして、あらためてお礼を申し上げます。

そして、14年2月2日、JR札幌駅西改札口前に「ウレシパモシリ北海道イランカラッテ像」が設置されました。中央のエカシ（長老）像はアイヌ木彫工芸の第一人者である藤戸竹喜氏の作品であり、その周りの巨大なイクパスイ（捧酒箸と訳される重要な祭具）も、代表的工芸作家の方々6名に制作していただきました。設置セレモニーで行ったカムイノミ（神への祈り）の儀式は、北海道大学の北原次郎太先生に祭司としてご指導をいただき、あとはすべてウレシパクラブの学生たちが執り行いました。この時には、北海道知事、札幌市長、企業のトップの方々などのご臨席を賜りましたが、若者たちによるカムイノミに新たな時代の幕開けを感じたとのうれしいお言葉をいただくことができました。

おわりに

このようにウレシパ・プロジェクトは、少しずつではありますが、着実に進展してきています。しかし、課題はまだたくさんあります。現在、学生たちはいろいろなスキルを身につけています。例えば、会員の皆様に送る会報は、難易度の高いソフトを使いながら作っていますし、映像編集などのトレーニングもやっています。けれどもやはり一番の要はアイヌ文化における専門性なので、それを重点的に学ばないといけません。もう1つは、アイヌの世界観をどうやって現代の中で獲得していくのか、これが最も大きな課題だと思っています。

20年のオリンピック・パラリンピックに向け、アイヌ文化への関心は一層高まっていくことでしょう。ウレシパクラブの学生たちが、そのような時代状況を牽引し、リーダー的役割を果たしてくれることを願ってやみません。